

仙台市文化財調査報告書第179集

仙台平野の遺跡群 XIII

—平成5年度発掘調査報告書—
燕沢遺跡第7次調査など

1994年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第179集

仙台平野の遺跡群 XIII

—平成5年度発掘調査報告書—
燕沢遺跡第7次調査など

1994年3月

仙 台 市 教 育 委 員 会

序 文

国庫補助事業として「仙台平野の遺跡群」発掘調査に着手したのは昭和56年度でした。この事業も数えて13年目を迎え、これまで陸奥国分寺跡、国分尼寺跡の国指定史跡の範囲確認調査や郡山遺跡、富沢遺跡などの個人住宅建築に伴う小規模調査を行ってまいりました。今年度は、燕沢遺跡の範囲の確認調査ならびに性格明確のための発掘調査、および、郡山遺跡の個人住宅建築に伴う発掘調査を実施しました。本書はそれらの調査成果をまとめたものであります。

当市は平成元年4月に政令指定都市となり、都市整備の充実が急務となってきております。こうした中で、道路整備に関わる総合交通体系の整備事業や区画整理事業を基盤とした町づくりが進められています。一方、民間の小規模開発も増加し、発掘調査件数も漸次増加する傾向にあります。

当市教育委員会では、先人の創造した歴史と文化遺産を次の世代に継承し、生活の中での活用を図っていかなければならない責務を負っています。しかし、こうした文化財の保護活用は、市民の方々の御支援があってこそ、はじめて成果をあげられるものと思います。

今後とも広い視野にたって充実した遺跡保護を行っていくために、精一杯努力してまいる所存でありますので、さらなる御指導、御支援を切にお願い申し上げ、刊行のご挨拶と致します。

平成6年3月

仙台市教育委員会

教育長 東海林 恒英

例　　言

1. 本書は平成5年度国庫補助事業である緊急遺跡範囲確認事業に伴う「仙台平野の遺跡群」の発掘調査報告書である。
2. 本書の土色については「新版標準土色帖」(小山・佐原：1973)を使用した。
3. 本書中で使用した地形図は建設省国土地理院発行の2万5千分の1「仙台南西部」・5万分の1「仙台」の一部である。
4. 実測図中の水系高は標高である。
5. 実測図、本文中の方位は真北を基準としてある。仙台においては、磁北は真北に対して西偏約7°20'である。
6. 本書作成・編集は、長島榮一、熊谷裕行が行い、執筆者名は文末に記した。
7. 遺構番号を次の通りとした。

S A 材木列 S B 建物跡 S D 溝跡・溝状遺構

S I 住居跡 S K 土坑 S X 性格不明遺構

8. 本書中に掲載した発掘調査で出土した遺物及び遺構・遺物の実測図は、全て仙台市教育委員会が保管している。
9. 今年度事業は平成5年4月に着手し、平成6年3月に終了した。

本 文 目 次

序 文

例 言

I. 調査計画と実績.....	1
II. 発掘調査報告.....	2
[1] 燕沢遺跡－第 7 次調査－.....	2
1. 位置と環境.....	2
2. これまでの調査.....	2
3. 調査経過.....	11
4. 発見遺構と出土遺物.....	11
5.まとめ.....	20
写真図版	
[2] 郡山遺跡.....	29
1. 位置と環境.....	29
2. 調査概要.....	29
第98次調査	

I 調査計画と実績

仙台市内における周知の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）の数は、約700箇所に達している。これらの遺跡は先人が残した貴重な文化遺産であり、先人の歴史と当時の具体的な生活の様子を現代に伝えるものである。私たちはこれらの文化遺産を次の世代へと継承していく責務を負っている。しかし仙台市は周辺の市町村との合併や政令指定都市への移行を経て、都市化に拍車がかかり、これらの遺跡の多くが破壊の危機にさらされているのが現状である。このような中で仙台市教育委員会では、遺跡の範囲と性格を事前に把握し保護をはかるために、国の補助を受けて「仙台平野の遺跡群」としての発掘調査を実施してきた。13年間をむかえた今年度は、燕沢遺跡と郡山遺跡の発掘調査を実施した。燕沢遺跡はこれまで区画整理や宅地造成、アパート建設とともに第1次から第6次までの発掘調査が行われてきた。本遺跡は戦前に石田茂作によって「燕沢寺」として紹介され、それ以来、古代の官衙あるいは寺院として論じられてきている。しかし昭和56年から行ってきた市教委による発掘調査では孤立柱建物跡や漆紙文書の発見はあったが、官衙か寺院かについては明らかにできなかった。そこで今年度より地権者の協力を得て、遺跡の中心部分と想定される地区的発掘調査を実施した。また継続的に実施されている郡山遺跡についても個人住宅建築に伴う発掘調査を1箇所で実施した。

1. 目的 仙台平野に分布する遺跡群の範囲確認、性格究明のための発掘調査

2. 調査面積 460m²

3. 調査期間 平成5年6月～9月

4. 調査体制

調査主体 仙台市教育委員会

調査担当 仙台市教育委員会文化財課

課長 白鳥 良一

調査第一係 係長 田中 則和 主任 木村 浩二 主事 長島 栄一

教諭 熊谷 裕行

管理係 係長 菅原 澄雄 主任 村上 道子 主事 斎藤 英治

主事 佐藤 寿江

調査実績表

調査地	所在地	申請者	調査理由	対象面積	調査面積	調査期間
燕沢遺跡	宮城野区燕沢東三丁目509	仙台市教育委員会 教育長 東海林 伍 美	範囲確認	951m ²	400m ²	平成5年6月1日 ～7月8日
郡山遺跡	太白区郡山二丁目22-17	太白区郡山三丁目22-17 斉藤 三郎	個人住宅建築	285m ²	60m ²	平成5年7月12日 ～9月1日

II 発掘調査報告

〔1〕燕沢遺跡—第7次調査—

1. 位置と環境

—地理的環境—

燕沢遺跡は、東北本線東仙台駅の北東約2kmの地点、仙台市宮城野区燕沢東三丁目・同区岩切字山崎西に所在している。

遺跡周辺の地形を概観すると、奥羽山脈から東に分岐する富谷・七北田丘陵（仙台市北部について「台原・小田原丘陵」の呼称がある）の間を七北田川が東流し、太平洋に注いでいる。七北田川の上・中流域の両岸には河岸段丘や自然堤防・後背湿地が発達している。

本遺跡は、台原・小田原丘陵の東端部、七北田川右岸の標高20~30m程の河岸段丘上に立地し、沖積地との比高差は10~20m程ある。

—歴史的環境—

燕沢遺跡周辺には、数多くの遺跡が分布している。特に七北田川両岸の段丘上や自然堤防上に集中している。

縄文時代・弥生時代の遺跡については不明な点が多いが、古墳時代以降には数多く形成されるようになる。自然堤防上には鴻ノ巣遺跡・岩切畠中遺跡・新田遺跡のような集落が営まれ、丘陵部には千人塚古墳や、善応寺・東光寺・入生沢・台屋敷の横穴墓群が造営される。また遺跡の南西約2kmにある大蓮寺窯跡では初期須恵器の生産が行われている。

奈良時代になると当遺跡の東北東約5kmに多賀城が、つづいて南南西約5kmに陸奥国分寺・同尼寺が建立される。これらに供給される瓦・須恵器等の生産が台原・小田原丘陵上で開始され、県内でも有数の古代窯業地帯となっていたようである。本遺跡は、戦前石田茂作氏によって燕沢寺として紹介され、その後古代の寺院や官衙跡として論じられてきている。

中世には七北田川左岸丘陵上に岩切城が留守氏によって築かれ、麓の留守氏菩提寺である東光寺には磨崖仏や多数の板碑が造立されている。その他周辺には猿森城跡・小鶴城跡などの跡跡がいくつかある。留守文書からもこの周辺が中世の中心であったことがうかがわれる。

2. これまでの調査

燕沢遺跡ではこれまで第1次（昭和56年）、第2次（昭和57年）、第3次（昭和62年）、第4次調査（平成元年）、第5、6次調査（平成2年）の調査が実施されている。

第1次調査では掘立柱建物跡3棟、土坑4基、溝跡5条、溝状遺構1条、ピット等を発見している。発見された遺構のうち3号掘立柱建物跡のN1E2柱穴より完形の平瓦が3枚、凹面



No.	遺跡名	種別	立地	時代	No.	遺跡名	種別	立地	時代
1	燕沢遺跡	寺院・官衙	丘陵	绳文～平安	12	岩切畠中遺跡	集落跡	自然堤防	绳文～平安
2	萬葉沢遺跡	散布地	丘陵	平 安	13	湯ノ巣遺跡	散布地	自然堤防	古墳～平安・中世
3	吉沢遺跡	散布地	丘陵	平 安	14	若宮前遺跡	散布地	丘陵	绳文～近世
4	千人塚古墳	円 墳	丘陵斜面	古 墓	15	東光寺横穴群	横穴墓	丘陵斜面	古 墓
5	山崎廻路	散布地	丘陵	绳文	16	岩切城跡	城	丘陵	中 世
6	小鶴城跡	城	丘陵	中 世	17	台屋敷横穴群	横穴墓	丘陵斜面	古 墓
7	大蓮窯跡	窑	丘陵斜面	古墳・奈良	18	入生沢横穴群	横穴墓	丘陵	古墳～平安
8	善光寺横穴群	横穴墓	丘陵斜面	古墳～平安	19	入生沢遺跡	散布地	丘陵 開	平 安
9	笠森城跡	城	丘陵	中 世	20	大正圓遺跡	散布地	自然堤防	平 安
10	北畠跡集落	集落	丘陵山林	绳文～平安	21	新宿四遺跡	散布地	自然堤防	平 安
11	船河原跡	城	丘陵	自然堤防 中 世	22	今市遺跡	散布地	自然堤防	平安・中世

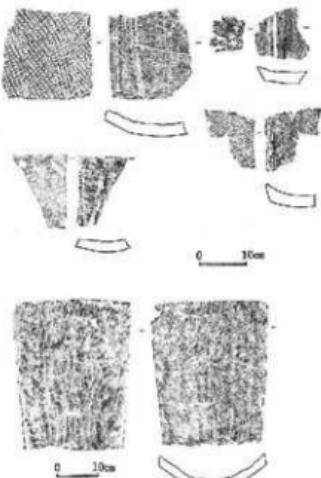
第1図 燕沢遺跡と周辺の遺跡



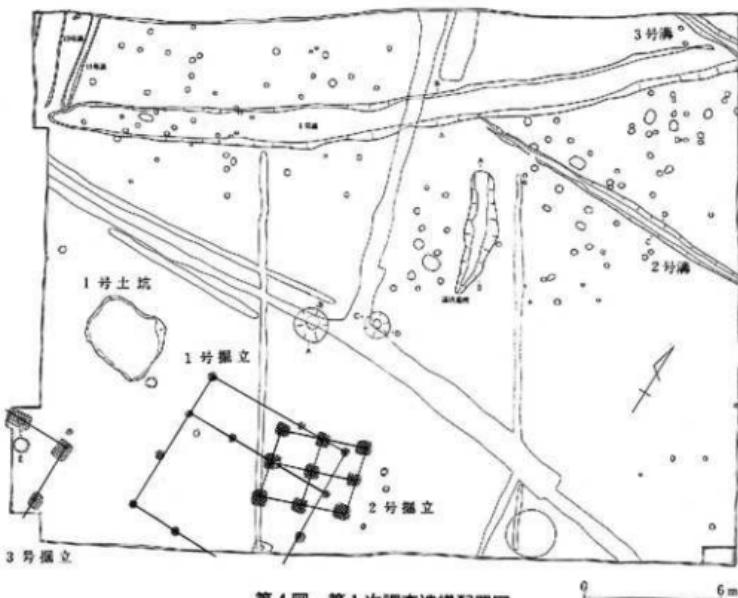
第2図 調査区位置図

0 100 200m

を上にして重なりあって出土した。柱痕跡の直下から出土していることから礎板として埋設されたと考えられている。瓦は一枚作りで凸面に綱叩き目、凹面に布目痕や糸切り痕が顕著に観察されるものである。1号土坑からはロクロ使用の土師器環・壺・須恵器環・甕・壺、平瓦・丸瓦、土製品が出土している。土師器環のなかで体部外面に「宗」と墨書きされたものが1点ある。この土坑から出土した瓦は平瓦では、粘土板巻き作りと一枚作りの平瓦が、丸瓦では粘土板巻き作りの無段丸瓦と粘土紐巻き作りの有段丸瓦が混在している。前述した3号掘立柱建物跡から出土した瓦とともに、平瓦が1類から5類、丸瓦が1類から4類に分類されている。この分類基準は基本的にこの後の発掘調査で出土した瓦の分類においても継承されている。



第3図 第1次調査出土遺物

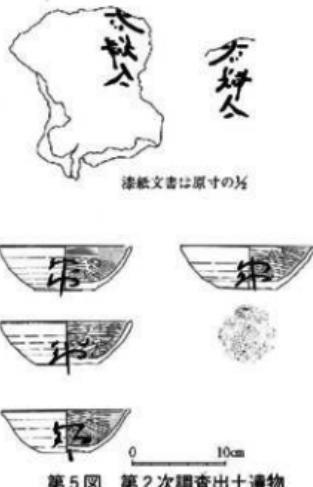


第4図 第1次調査造構配置図

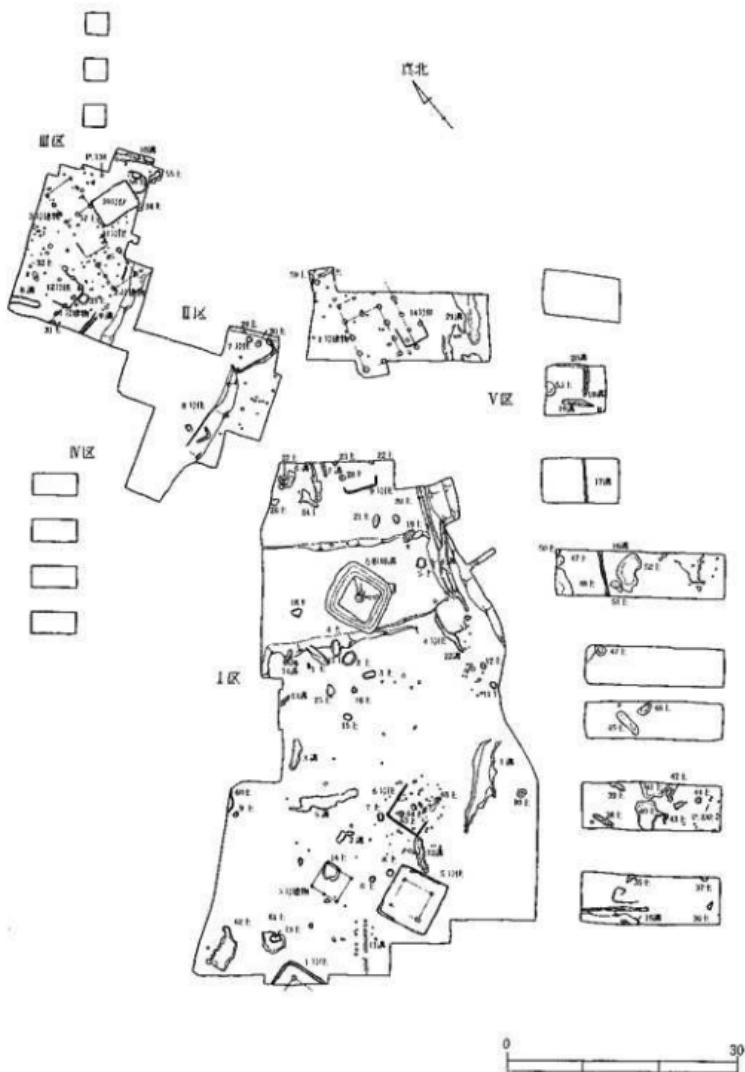
0 6m

第2次調査では竪穴住居跡11軒、掘立柱建物跡6棟、方形周溝1基、土坑65基、溝跡8条、溝状遺構14条、ピット等が発見されている。10号住居跡からはロクロ使用の土師器壺とともに、瓦や硯、「右婦人」とされる漆紙文書が出土している。この住居跡にはカマドがなく、床面上で炉跡が検出されていることから、工房跡の可能性も指摘されている。また12号住居跡やピット232、遺物包含層から墨書きされたロクロ使用の土師器壺が出土している。とくにピット232からは「中」と墨書きされたものが8個体まとまって出土している。遺構、遺物から5時期の変遷を設定している。

1期：縄文時代　早期・前期の土器片、石器など



第5図 第2次調査出土遺物



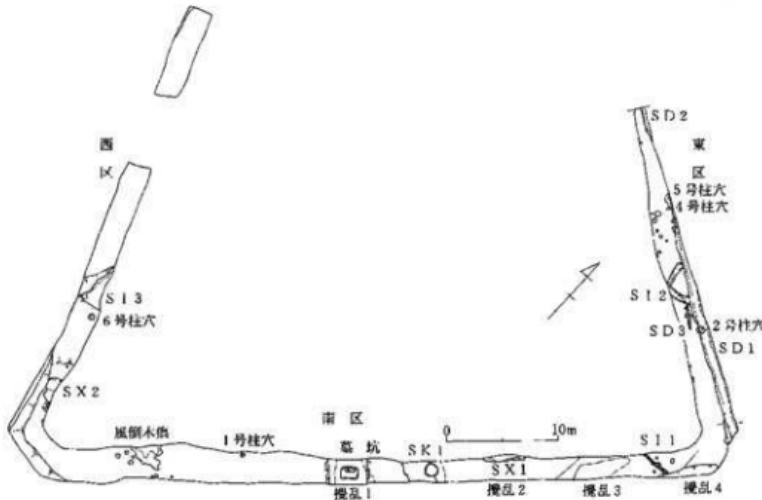
第6図 第2次調査遺構配置図

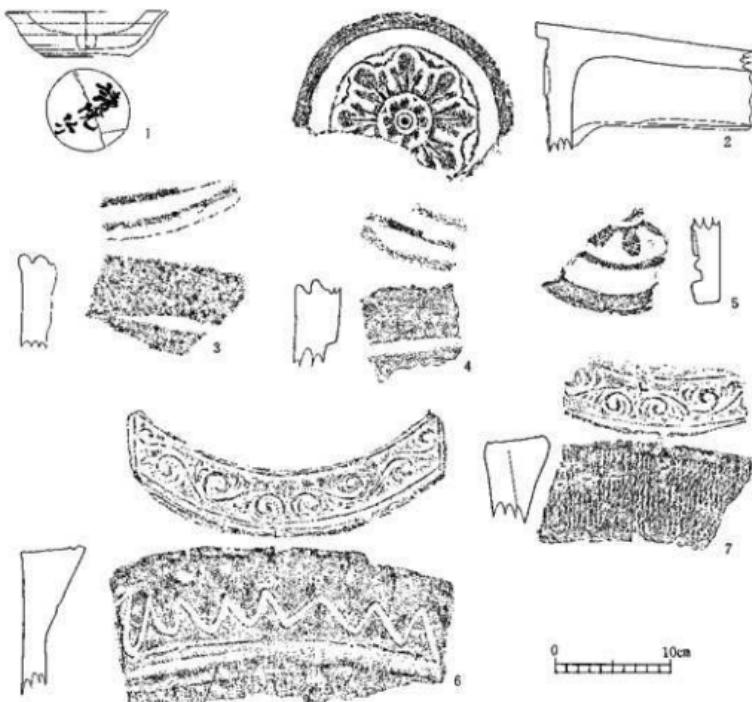
- 2期：弥生時代 土坑1基、弥生土器片、石器など
- 3期：古墳時代 穫穴住居跡4軒など
- 4期：奈良時代 瓦（多賀城創建期以前、多賀城創建期）の出土
- 5期：平安時代
- 5a期 穫穴住居跡8軒など——10世紀前半以前—
 - 5b期 掘立柱建物跡4棟など——10世紀前半以降—

なお遺跡の性格についても遺構の方向や配置に規則性を認め、漆紙文書の出土と合わせて官衙としての性格を指摘している。

第3次調査では竪穴住居跡2軒、竪穴造構1基、溝跡2条、溝状造構1条、墓坑1基、土坑1基、柱穴6、性格不明な造構2、ピットなどが発見されている。調査区の幅が1~6mと一定でなく、調査区の形態もきわめて特異なため、ほとんどの造構がごく一部のみ検出されたにすぎない。

SD1、S11・2、柱穴などは10世紀後半の年代とされている。造構に伴った遺物は少ないと、須恵器坏のうち底部に「讀院口」、「牛」と墨書きされ、土師器坏でも底部に「虫々」と墨書きされたものがある。とくに讀院と墨書きされた須恵器の内面には油脂の多いススが付着し、灯明皿状の使われ方を想定させる様相である。周辺から出土したロクロ使用の土師器坏についても、内面にススの付着したものが30個体程ある。この他に瓦も出土し第1次調査で出土した同種類の平瓦や丸瓦の他に、軒丸瓦（宝相華文、齒車文）や軒平瓦（ロクロびき重弧文、均整唐草文）



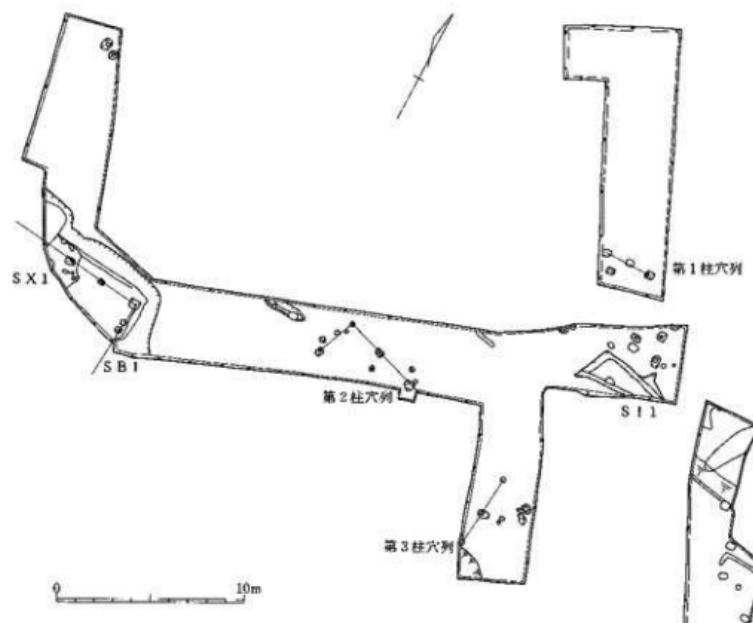


第8図 第3次調査出土遺物

も出土している。均整唐草文軒平瓦は第2次調査でも破片が出土しているが、今次調査区から出土したものは瓦當面が完全に残存したものである。

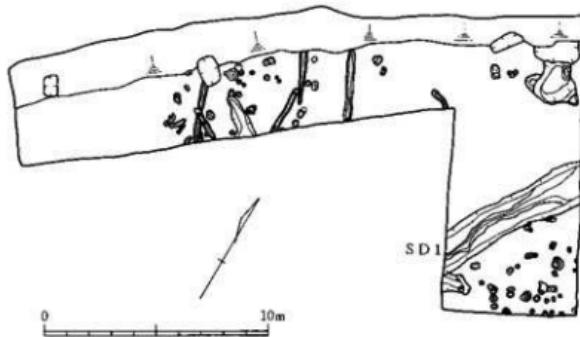
第4次調査では竪穴住居跡1軒、掘立柱建物跡1棟、平場1、柱穴列3列、溝、ピットなどが発見されている。竪穴住居跡は出土土器から8世紀後半頃と考えられるが、丸瓦を8個体連続して堆積した暗渠状の施設を有している。丸瓦は粘土板巻き無段丸瓦、粘土紐巻き無段丸瓦、粘土紐巻き有段丸瓦の3種類である。掘立柱建物跡は自然地形の斜面を切って造り出された平場上に位置し、平場上の出土遺物から平安時代に属させている。

第5次調査では竪穴住居跡2軒、竪穴構造1基、土坑5基、ピット等が発見されている。そのうちSK2からは東北地方の土師器編年で国分寺下層式期と考えられる土器が出土している。



第9図 第4次調査造構配置図

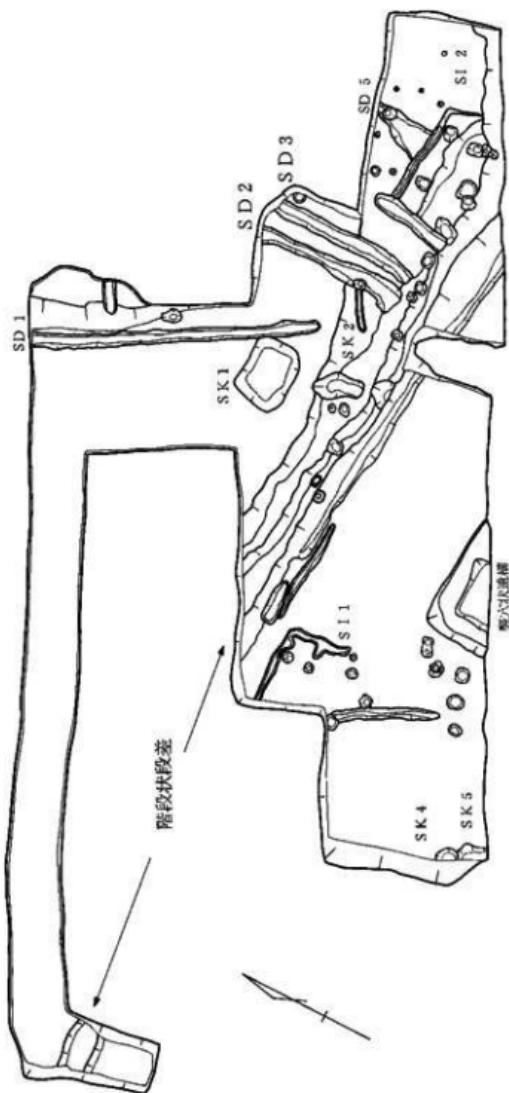
第6次調査では堅穴住居跡1軒、溝、土坑などが発見されている。このうち古代の造構は溝跡1条のみである。



第10図 第6次調査造構配置図

0 10m

第11図 第5次調査測量配置図



3. 調査経過

燕沢遺跡ではこれまで発掘調査が実施された箇所が官衙あるいは寺院の中心部とは考え難く、これまで調査されなかった遺跡内で最も高い標高31m程の平坦地を調査の対象地とした。土地所有者嶺岸一雄氏の同意が得られたことから、燕沢3丁目509地内の発掘調査を燕沢遺跡第7次調査として実施した。

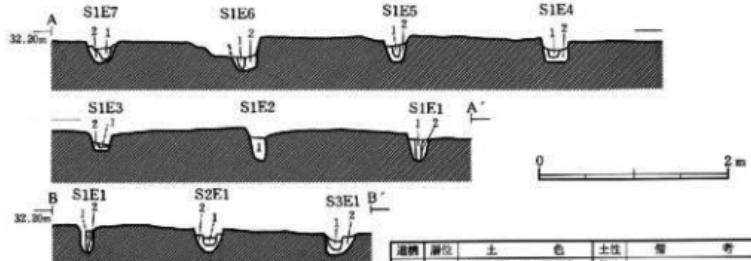
調査は遺構の分布を把握するための試掘調査を調査対象地内の40m²程度で実施し、その成果に基づき幅10m、長さ35mの調査区を設定した。のちに必要に応じ15m²程度の拡張を実施した。発掘調査は平成5年6月1日から実施し、7月8日に終了した。

4. 発見遺構と出土遺物

第7次調査で発見された遺構は、掘立柱建物跡1棟、溝跡5条、竪穴住居跡1軒、土坑1基、小柱穴9、ピットなどである。これらの遺構は畑の耕作土（基本層位第I層）の直下の第II層上面で検出されている。

S B 1 掘立柱建物跡 衍行6間、総長9.8m（柱間寸法150～170cm）、梁行2間、総長2.5～2.65m（柱間寸法120～135cm）の東西棟の建物跡で、方向は梁行でN-24°-Wである。柱穴は直径17～40cmの円形か楕円形、あるいは一辺22～33cmの隅丸方形で、柱痕跡の検出されたものは直径9～18cmの円形である。柱穴の深さは遺構を検出した上面より20～35cm、埋土はにぶい黄褐色、褐灰色粘土などである。S D 1 溝跡に切られている。

S D 1 溝跡 総長11m以上で南北に延びる溝跡である。上幅46～77cm、下幅30～50cm、深さ8～14cm、断面形状はU字形である。方向はN-4°-Wで、堆積土は褐色粘土質シルト、シルト



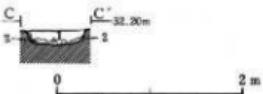
遺構	層位	土色	土性	備考
SIE1	1	10YR4/3に2%の黄褐色	粘土	
	2	10YR7/6明黄色	粘土	
SIE2	1	10YR4/3に2%の黄褐色	粘土	
	2	10YR7/6明黄色	粘土	
SIE3	1	10YR4/3に2%の黄褐色	粘土	
	2	10YR7/6明黄色	粘土	
SIE4	1	10YR6/1褐色	粘土	
	2	10YR7/6明黄色	粘土	
SIE5	1	10YR4/3に2%の黄褐色	粘土	
	2	10YR7/6明黄色	粘土	
SIE6	1	10YR4/3に2%の黄褐色	粘土	
	2	10YR7/6明黄色	粘土	
SIE7	1	10YR4/3に2%の黄褐色	粘土	
	2	10YR7/6明黄色	粘土	
SIE8	1	10YR5/4赤い黄褐色	粘土	東褐色粘土を少量に含む
	2	10YR5/1褐色	粘土	
SIE9	1	10YR4/3に2%の黄褐色	粘土	
	2	10YR7/6明黄色	粘土	

遺構	層位	土色	土性	備考
SIE5	1	10YR4/3に2%の黄褐色	粘土	
	2	10YR7/6明黄色	粘土	
SIE6	1	10YR4/3に2%の黄褐色	粘土	
	2	10YR7/6明黄色	粘土	
SIE7	1	10YR4/3に2%の黄褐色	粘土	
	2	10YR7/6明黄色	粘土	
SIE8	1	10YR5/4赤い黄褐色	粘土	東褐色粘土を少量に含む
	2	10YR5/1褐色	粘土	
SIE9	1	10YR4/3に2%の黄褐色	粘土	
	2	10YR7/6明黄色	粘土	

第12図 S B 1 掘立柱建物跡断面図

質粘土である。S B 1 堀立柱建物跡を切っている。

〔出土遺物〕 堆積土中より土師器壺、甕片、須恵器片、平瓦片、底面より平瓦片が少量出土している。



S D 2 溝跡 総長19m以上で東西に延びる溝跡である。

調査区西端付近でL字あるいはT字に屈曲していると想定

される。上幅46~205cm、下幅15~50cm、深さ6~22cm、

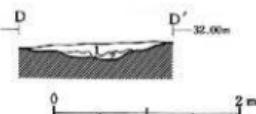
第13図 S D 1 溝跡断面図

断面形は扁平な逆台形で、壁はきわめて緩やかに立ち上がっている。そのため削平された箇所では著しく上幅が細くなる。方向はE-5°-Nで、堆積土はにぶい黄褐色シルト、砂質シルトである。SK 4 土坑に切られている。

〔出土遺物〕 堆積土中より土師器、須恵器、瓦の細片が少量出土している。

S D 3 溝跡 総長2.8m以上で東西に延びる溝跡である。

上幅32~51cm、下幅22~40cm、深さ2~9cm、断面形は逆台形である。方向はE-10.5°-Sで、堆積土は暗褐色粘土質シルト、明黄褐色シルト質粘土である。



〔出土遺物〕 堆積土中より土師器、瓦片が各1点出土した。

層位	土色	土性	備考
1	10YR4/3にぶい黄褐色	シルト	砂を含む
2	10YR4/3Cにぶい黄褐色	シルト質粘土	炭化物を含む

第14図 S D 2 溝跡断面図

S D 4 溝跡 総長3.8m以上で東西に延びる溝跡である。

上幅14~24cm、下幅6~16cm、深さ1.5~6cm、断面形は逆台形である。方向はE-1°-Sで、堆積土は暗褐色粘土質シルト、橙色シルト質粘土である。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

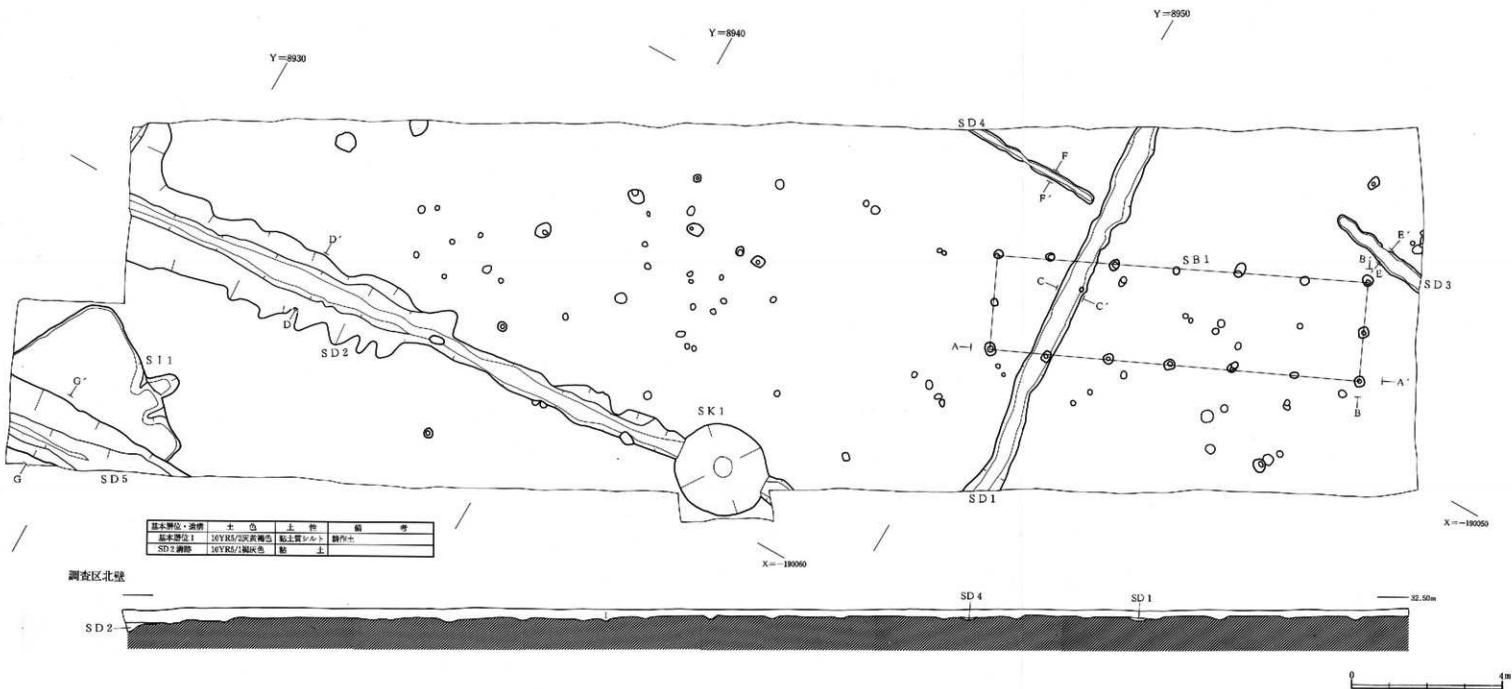


第15図 S D 3・4 溝跡断面図

S D 5 溝跡 総長5.5m以上で東西に延びる溝跡である。調査区西南端付近で検出され、上幅175cm、下幅7~18cm、深さ24cm、断面形は扁平な逆台形で、壁はきわめて緩やかに立ち上がっている。ただし調査区の南壁ぎわでは底面幅が狭まり、断面形もV字状になる。方向はE-0°-N(真東西方向)で、堆積土は灰黄褐色シルト、暗褐色砂質シルトなどである。S I 1 穴住居

層位	土色	土性	備考
1	10YR2/2灰黄褐色	シルト	炭化物をわずかに含む
2a	10YR2/4暗褐色	砂質シルト	石英質の粗砂を含む
2b	10YR4/4褐色	砂質シルト	2aよりやや粗るい質
3	10YR2/3暗褐色	シルト	鐵器の崩落土
4	10YR4/3Cにぶい黄褐色	砂質シルト	粗砂を多く含む

第17図 S D 5 溝跡断面図



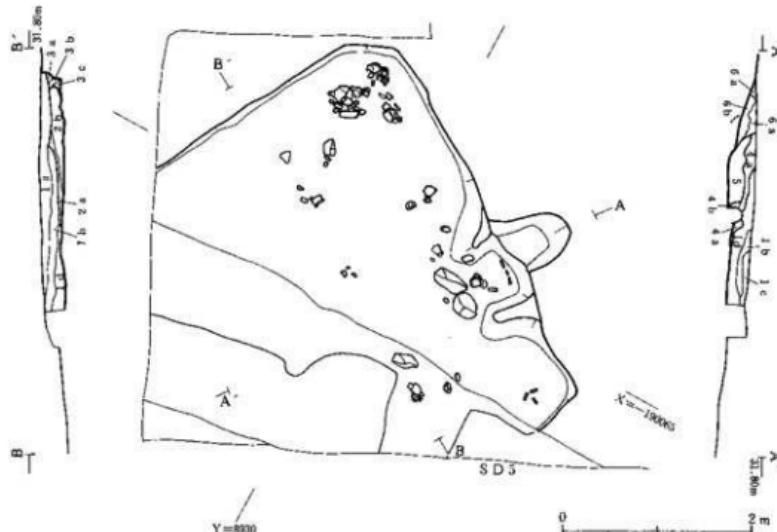
第16図 第7次調査区平・断面図 (1/100)

跡を切っている。

[出土遺物] 堆積土中より土師器、瓦の細片が少量出土した。

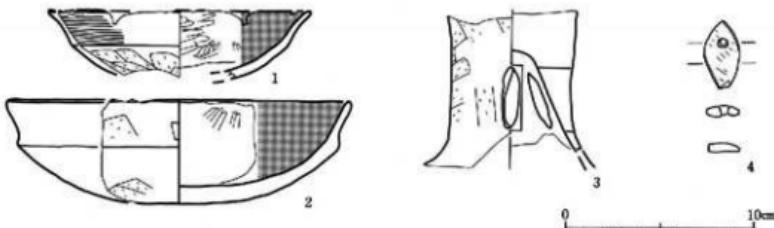
S I 1 穫穴住居跡 4.6m×4.4m 以上の竪穴住居跡である。カマドを有する壁方向で、N-55°-W である。残存する深さは 20~28cm で、堆積土は床面上まで 6 層である。カマドは壁中央よりやや南寄りに位置し、長さ 70cm、幅 55cm の舌状に外側に張り出している。柱穴は検出されなかった。床面上には多量の炭化物とともに土器片がまとまりをもって出土した。

[出土遺物] 堆積土中より土師器 C-2 壺、C-3 壺(第19図 2、1)、C-4 高壺の脚部(第19図 3)、その他土師器壺片や須恵器片が出土している。また床面上からは土師器壺(図版 9-7 など)が 3 個体分ほど出土しているが、火熱を受け器面の残存状況がきわめて良くない。Pit 1 の埋め土中より石製模造品 K-2 (第19図 4) が出土している。



部位	上	色	下	性	備
1a	10YR2/2M4褐色			粘土質シルト	
1b	10YR4/1M0灰色			粘	黄褐色粘土を微細含む
1c	10YR4/1M0灰色			粘	+ 黄褐色粘土を少量含む
1d	10YR4/1M0灰色			粘	同褐色粘土をブロック状に含む
2a	10YR2/1M0灰色			粘	
2b	10YR2/1M0灰色			粘	土
2c	10YR2/1M0灰色			粘	土
3a	10YR5/1M0灰色			粘	土
3b	10YR8/8青			粘	+ 駿の崩落土
3c	10YR5/1M0灰色			粘	土
4a	10YR5/1M0灰色			粘	土
4b	10YR3/1M0灰色			粘	土
5a	10YR8/3M2土い黄緑			粘	カマド火井の崩落土
6a	10YR6/4M2土い黄緑			粘土質シルト	焼土を多量に含む
6b	10YR6/4M2土い黄緑			粘土質シルト	燒土を含む

第18図 S I 1 穫穴住居跡平・断面図

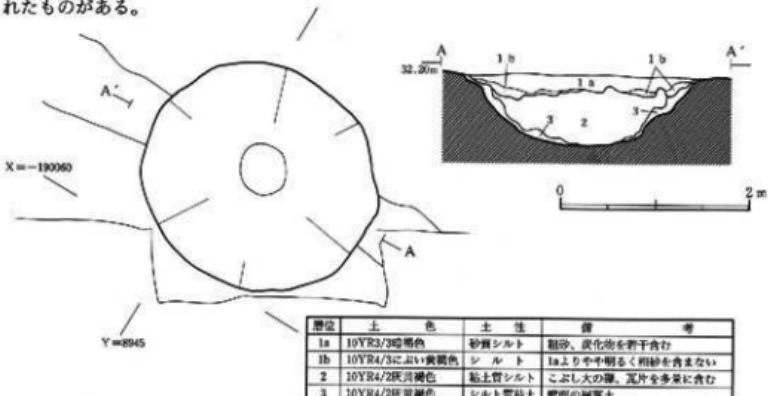


図版 番号	登録 番号	種類 別 形	出土地点			法 全(cm)	外 面調査			内 面調査			写真 回数	
			地区	通 構	層 位		深 度	口徑 底径	断 面	口縁部	底 部	底 部		
1	C-3	土縫壺	7次	S11	底 上 中	3.5	14	—	ナデ	ケズリ	ミガキ	ミガキ	内面黒色底無	
2	C-2	土縫壺	7次	S11	堆 積 上 中	6.5	9.2	—	ケズリ	ケズリ	ミガキ	ミガキ	内面黒色底有 9-5	
3	C-4	土縫壺裏耳	7次	S11	1 層	8.4	—	—	—	ケズリ	—	—	—	9-6
4	K-2	石製櫛遺品	7次	S11	Pit. 1	全 長 3.6cm 最大幅 1.9cm	—	—	—	—	—	—	—	9-4

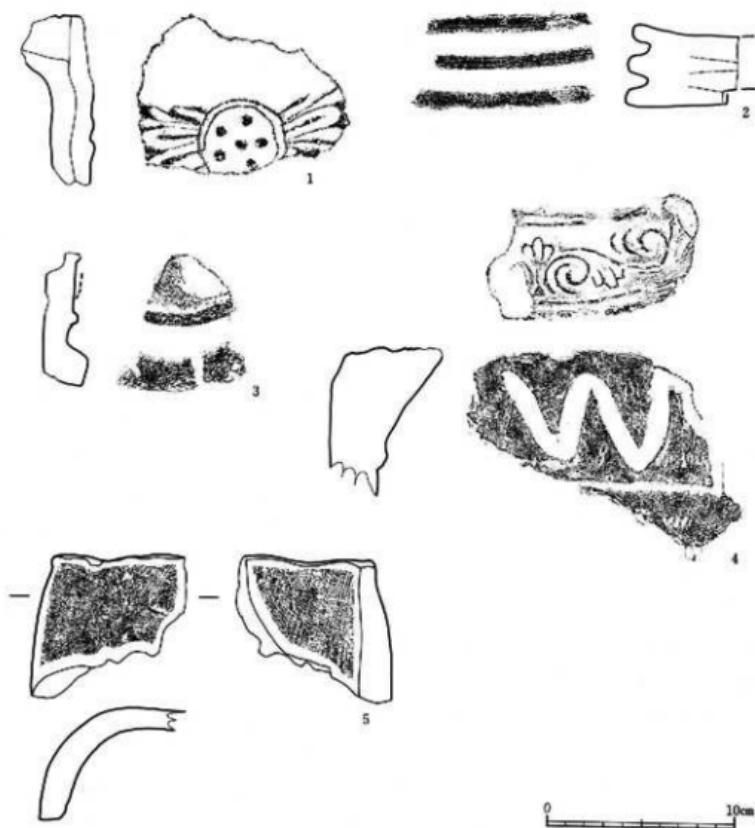
第19図 S11 積穴住居跡出土遺物

SK 1 土坑 直径2.5m程のほぼ円形で、深さ75cmの土坑である。堆積土は3層で、2層中よりこぶし大の礫とともに多量の瓦片が出土している。SD 2溝跡を切っている。

【出土遺物】 堆積土第2層より細片であるが多量の瓦と少量の土師器、須恵器、磁器片が出土している。さらに底面からG-1平瓦（第23図2）が出土している。出土した瓦のうち軒丸瓦はF-1細弁蓮華文軒丸瓦（第21図1）、F-5齒車文軒丸瓦（第23図3）、軒平瓦ではG-2均整唐草文軒平瓦（第23図4）、G-3重弧文軒平瓦（第21図2）である。丸瓦は有段のものと無段のものがある。平瓦は凸面が繩叩き、平行叩き、格子叩き、さらに繩叩きの後すり消されたものがある。

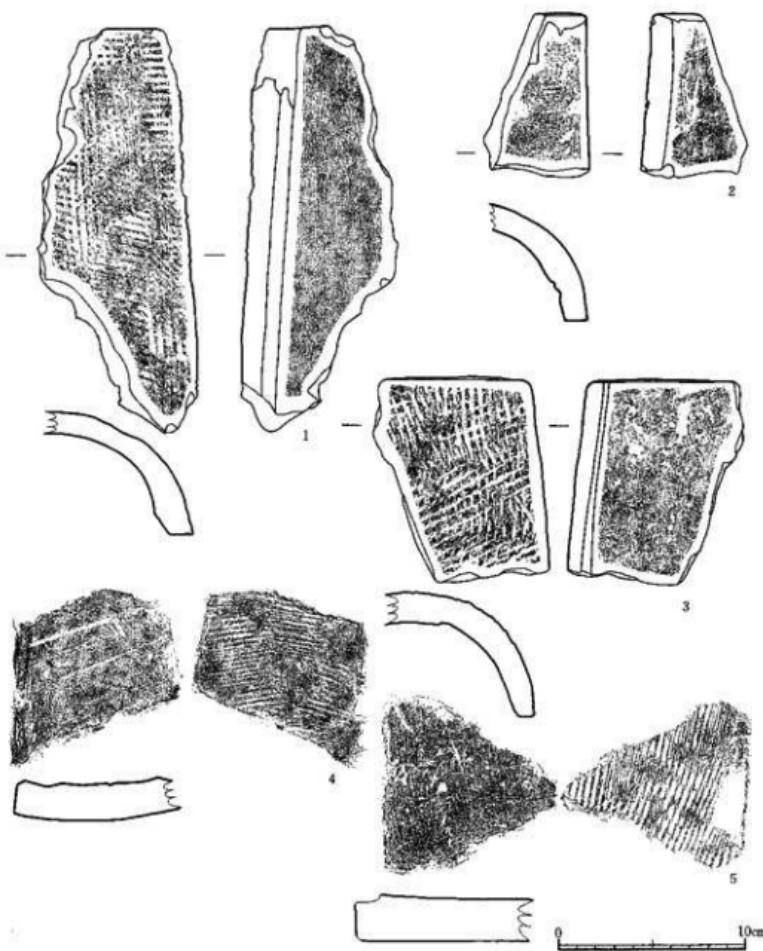


第20図 SK 1 土坑平・断面図



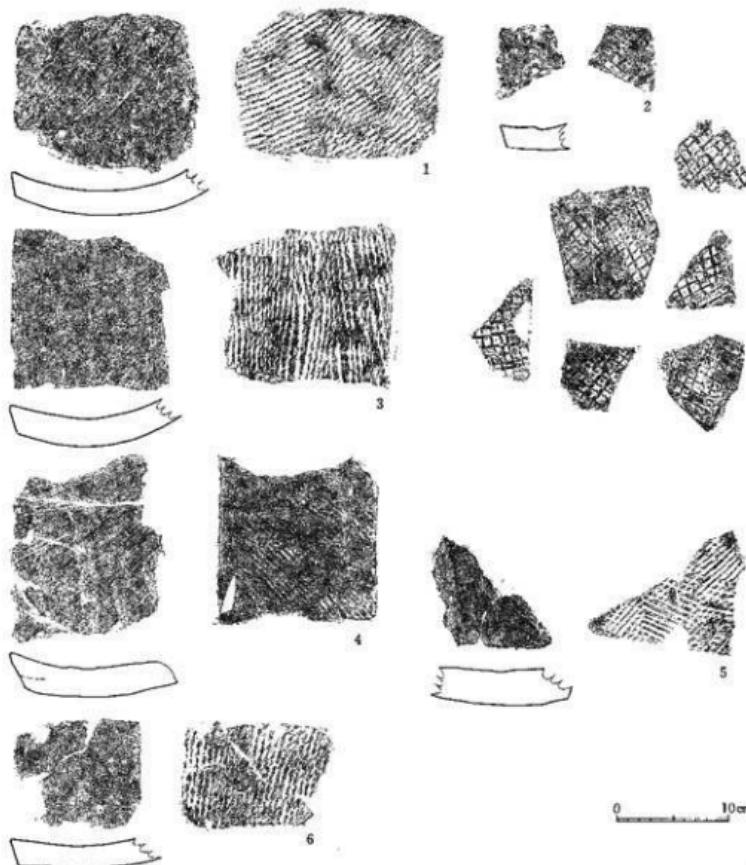
回数	器種	器形	出土地	地	外面調査	内面調査	備考	写真 図版
番号			地区	道 市	層位			
1	F 1	軒丸瓦	7次	SK-1	2層	鉢弁蓋革文	四面 布目→すり消し	9-1
2	G 3	軒丸瓦	7次	SK-1	2層	轆轤文	凸面 すり消し	9-2
3	F 5	軒丸瓦	7次	SK-1	2層	轆轤文	すり消し	9-3
4	G 2	軒平瓦	7次	SK-1	2層	均輪蓋革文	四面 布目 凸面 袋狀文、圓印き	9-1
5	F 7	丸 瓦	7次	波模様上面		すり消し	布目板	

第21図 SK 1 土坑出土遺物 (1)



図版 番号	登録 番号	種類 形	出土場所			考	写真 回数
			地区	遺構	層位		
1	F-2	丸瓦	7次	SK-1 堆積土	2層	平行叩き	布目板
2	F-4	丸瓦	7次	SK-1 堆積土	2層	すり消し	布目板
3	F-3	丸瓦	7次	SK-1 堆積土	2層	平行叩き	布目板
4	G-4	平瓦	7次	SK-1 堆積土	2層	平行叩き	布目板
5	G-9	平瓦	7次	SK-1 堆積土	2層	平行叩き→すり消し	道目瓦の可塑性有り

第22図 SK 1 土坑出土遺物 (2)



0 10cm

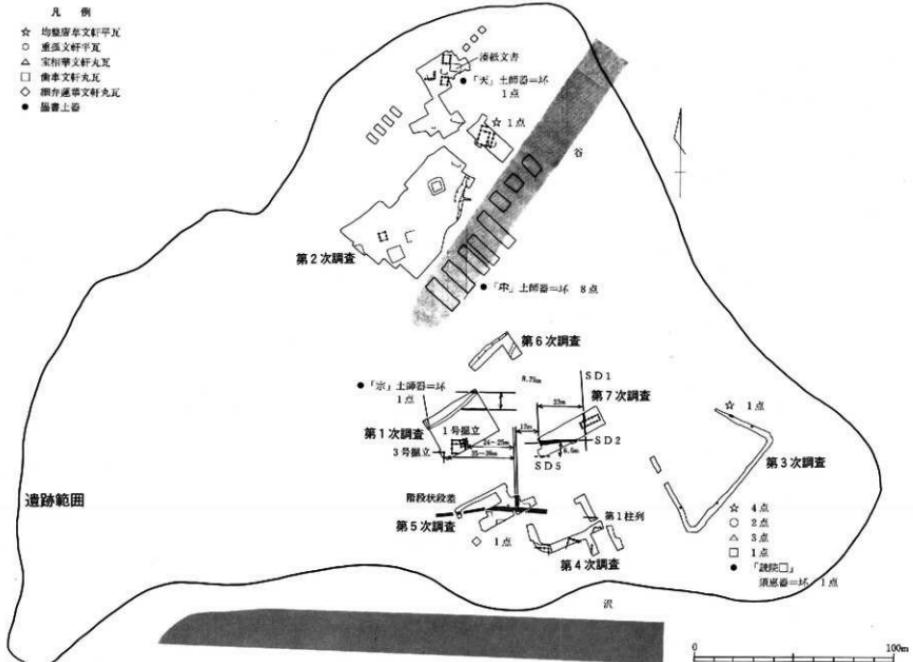
図版 番号	名 称 番 号	形 態 形	出 土 地 点			四 面	四 面	備 考	写 真 板
			地 区	遺 跡	層 位				
1	G-5	平 瓦	7次	SK-1	2層	糸切り痕跡	平行叩き		
2	G-1	平 瓦	7次	SK-1	2層	布目痕	格子叩き		
3	G-10	平 瓦	7次	SK-1	油面	布目、糸切り板	網口叩き		
4	G-8	平 瓦	7次	SK-1	2層	布目痕	網印5-スリ溝		
5	G-?	平 瓦	7次	SK-1	2層	布目痕	平行叩き		
6	G-6	平 瓦	7次	SK-1	2層	布目痕	網印5		

第23図 SK 1 土坑出土遺物 (3)

5.まとめ

今回の第7次調査で発見された遺構は、掘立柱建物跡1棟、溝跡5条、竪穴住居跡1軒、土坑1基、小柱穴9、ピットなどである。そのうち出土した遺物から年代の検討が可能なのは、S I 1 竪穴住居跡とSK 1 土坑である。S I 1 竪穴住居跡の床面上から出土した土器は、調整にロクロを使用しない土師器壺で3個体分と考えられる。いずれも火熱を受けており、残存状況も悪く、実測図を作成することはできなかった。しかし堆積土中に含まれていた土師器壺類の特徴を見ると、C-2 壺は体部中位の段から上が丸みを有しながらも直線的に外反している。C-3 壺はC-2 壺よりも段から上が外反気味になるもので、口径に比してやや器高が高そうである。このことから高壺の壺部となる可能性も残されている。C-4 高壺は脚部だけであるが脚部中に窓が空けられている。このような壺類の特徴は東北地方の土師器編年から見ると7世紀の前半代を中心とした栗開式の土師器（註1）よりやや新しい要素とみることが可能であり、むしろ宮城県色麻町色麻古墳群の71号墳出土の土師器や仙台市郡山遺跡SD 35溝跡出土の土師器などの7世紀後半代から8世紀初めにかけての土師器に類似した特徴を見い出せる。したがってこの住居跡については8世紀初め頃に埋まつたものと考えたい。SK 1 土坑については種々の瓦が出土している。しかし近世以降と考えられる磁器片も出土しているため、きわめて新しい遺構と考えられる。溝跡については浅いものもあり遺物も小片しか出土していないので年代の検討がしがたいが、中世以降の遺物が出土していないので古代の遺構と考えておきたい。なお掘立柱建物跡についても柱穴から遺物が出土していないが、溝跡より古いことから古代に属するものと見ておきたい。

以上のように今回の調査では燕沢遺跡の性格を決定できるような遺構の発見はなかった。したがってこれまで発掘調査の成果と合わせて若干の検討をしてみたい。遺構については遺跡北から入る谷を挟んでその北部と南部とでは、遺構の在り方に違いが見られる。谷の南部ではこれまでの調査によって真北方向（真東西方向）かやや西（北）に寄った方向で小規模な溝跡が検出されている。いずれも出土遺物は少ないが古代より新しい時期の遺物は含まれていない。今回の調査で発見されたSD 1・2・5 溝跡なども同じ様相である。さらに同方向の遺構としては、第4次調査の第1柱列や第5次調査の階段状の段差もあり、中世以降の遺物を出土しないことから溝跡と同様に考えたい（註2）。これらの遺構は遺跡内南部の標高28mから31mの丘陵頂部だけに限られ、土地の区割りや道路状遺構に伴う溝跡と推定されないのであろうか。各溝跡の中で時期差があるかどうかについては明らかでないが、溝跡間の距離が12m(40尺)、あるいはほぼ24m(≈80尺)となる箇所がある。なお第1次調査の掘立柱建物跡（1号、3号）と溝跡の距離についても24m(80尺)、36m(120尺)の間隔がある。なおこれらの溝跡の年代については溝跡と平行する配置の第1次調査3号掘立柱建物跡の柱穴から多賀城跡第III期に比定



第23図 燕沢遺跡遺構配置図

されるという平瓦が出土している（註3）。この瓦は台原・小田原塚跡群の中の五本松塚跡出土の平瓦II類（註4）ときわめて類似しているもので、陸奥国大地震の後の復興期の瓦とされ、貞観11年（869）以降の年代が考えられている（註5）。したがってここでは丘陵上部で発見された溝跡について、多賀城跡のIII期以降の年代と見ておき、調査成果の蓄積を待って検討していきたい。

遺跡の性格についても今回の調査では、これまでの調査以上に進めて検討できる遺物の発見はなかった。しかしこまでの調査で出土した遺物を改めて観察すると、第1次調査の3号掘立柱建物跡出土の瓦のように重要な遺物も含まれている。とくに第3次調査で出土した遺物は今後の調査を進める上できわめて注目されるものである。須恵器壺底部に「讀院」（第8図1）と墨書きされたものがある。古代の寺院においては主要伽藍に付属して機能ごとにまとまった院が形成されていたと言われている。（註6）陸奥国分寺跡でも須恵器壺の中に「僧房」、「東」、「西」などとともに「講院」と墨書きされた土器が出土している。さらに「讀院」と墨書きされた土器は下野國分寺跡からも出土している。なお上総國分寺跡では主要伽藍の周辺で出土した墨書き土器から、「東院」、「厨院」、「油菜所（薬院）」などの存在が想定されている。このような類例から燕沢遺跡の性格についても寺院の可能性が窺えることを指摘したい。「讀院」と墨書きされた須恵器の内面にはスヌが付着していた。この須恵器とともに第3次調査では、内外面にスヌが付着したロクロ使用の土師器壺が30個ほどまとまって出土している。これら土師器の年代については10世紀後半から11世紀初頭とされている（註7）。スヌの付着の状態から灯明皿状の使用や祭祀に関連した使用（註8）が想定され、墨書きされた字義とともに注目したい。この他に第3次調査で出土した宝相華文軒平瓦（第8図2）は陸奥国分寺跡や多賀城跡では出土していないものである（註9）。また均整唐草文軒平瓦（第8図6、7）も同様であり、今後の調査でも重要な課題と考えられる。

以上今回の調査とこれまでの調査から、遺跡の南部に溝跡などによる土地の区割りや道路状遺構の存在を指摘し、合わせて寺院の存在も想定してみた。ともに平安時代を中心とした時期に位置付けられるようであるが、直接関連があるかどうかについては今後の調査を待って判断したい。またそれぞれの年代についてもさらに検討が必要と考えられる。 （長島榮一）

（註）

註1 氏家和典「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯

仙台市文化財調査報告書第43集「栗遺跡」1982 第12号住居跡出土遺物

註2 第5次調査の階段状段差については報文中で段切りされた時期を近年の可能性と指摘しているが、調査以前に表土上では観察されなかったことから、年代が遡る可能性もある。

- 註3 仙台市文化財調査報告書第39集「燕沢遺跡」1982 P25 註9
- 註4 仙台市文化財調査報告書第99集「五本松窯跡」1987
- 註5 仙台市文化財調査報告書第99集「五本松窯跡」1987、なお五本松窯跡出土の瓦との比較については調査担当の小川淳一氏より教示を受けた。
- 註6 竹内理三「奈良朝時代における寺院経済の研究」
日高町文化財調査報告書第5集「但馬國分寺木簡」1981
- 註7 仙台市文化財調査報告書第116集「燕沢遺跡」1988 P24
- 註8 多賀城市史 第4巻 考古資料 P158
多賀城市山王遺跡東町浦地区 SK16 土坑から土器内面に油煙の付着した墨書き土器が出土し、仏教行事である万燈会を想定している。
- 註9 日本国史考古学「歴史考古」第13号 1965
工藤雅樹「陸奥國分寺出土の宝相華文鏡瓦の製作年代について——東北地方における新羅系古瓦の出現——」

(参考文献)

- 仙台市文化財調査報告書第39集「燕沢遺跡」1982 (第1次調査)
- 仙台市文化財調査報告書第62集「燕沢遺跡」1984 (第2次調査)
- 仙台市文化財調査報告書第116集「燕沢遺跡」1988 (第3次調査)
- 仙台市文化財調査報告書第154集「燕沢遺跡」1991 (第4・5・6次調査)
- 仙台市文化財調査報告書第168集「大蓮寺窯跡」1993 (第2・3次調査)
- 仙台市文化財調査報告書第29集「郡山遺跡I」1981 (第4・7次調査)
- 仙台市文化財調査報告書第74集「郡山遺跡V」1985 (第43次調査)
- 宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所「多賀城跡」政庁跡記録編1980
- 宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所「多賀城跡」政庁跡記録編1982
- 陸奥國分寺跡発掘調査委員会「陸奥國分寺跡発掘調査報告書」河北文化事業団1961
- 宮城県文化財調査報告書第116集「碩沢・大沢窯跡ほか」1987
- 宮城県文化財調査報告書第103集「香ノ木遺跡・色麻古墳群」1985
- 第20回城跡官衙遺跡検討会資料1994
- (財)千葉県文化財センター「房総考古学ライブラリー7 歴史時代(1)」1993
- 栃木県立しもつけ風土記の丘資料館「東山道の国分寺——守に込められた願い——」1993
- 石田茂作監修・原田良雄編「東北古瓦図録」1974
- 北九州市立歴史博物館「國跡新羅の古瓦塙」1975
- 国立中央博物館「雁鷺池」1980
- 井上功「朝鮮瓦塙図録IV 新羅2」1977
- 角田文衛「新修 国分寺の研究 第3巻 東山道と北陸道」吉川弘文館 1991



図版1 遺跡周辺 昭和36年(1961)撮影



図版2 遺跡全景 平成2年(1990)撮影



図版3
第7次調査区全景
(北東より)



図版4 S I 1 壁穴住居跡
(南西より)



図版5 SK 1 土坑
(北より)

図版6 SK1土坑断面
(北より)



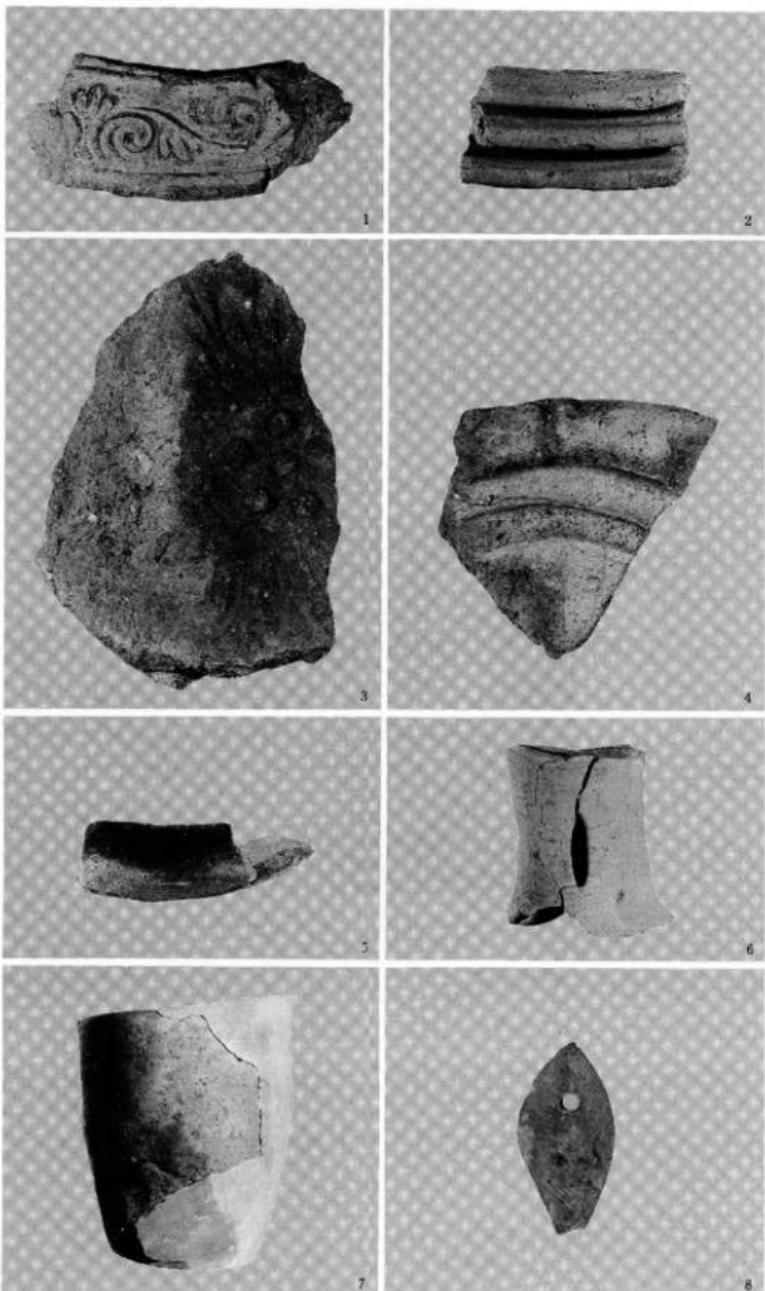
図版7 SK1土坑
瓦出土状況
(北より)



図版8 表採された軒丸瓦
(寄贈品)

丘陵の縁辺部から
出土したという





図版9 出土遺物

[2] 郡山遺跡

1. 位置と環境

郡山遺跡は仙台市太白区郡山二丁目～六丁目に位置し、東西800m、南北900mの72万m²に及ぶ遺跡である。遺跡の北から東にかけて広瀬川、南を名取川が流れ、西北は長町の市街地を介して標高100～200mの丘陵が迫り、西南は平野部が続いている。発掘調査は昭和55年から継続的に進められ、以下のことが明らかになってきている。新しい時期(II期官衙)と古い時期(I期官衙)の2時期の官衙が同地にあったこと。I期官衙は造営基準方向が真北から30～40°ふれしており、外郭施設は未だに不明瞭であるが内部には官舎や倉が集中していたこと。II期官衙は造営基準方向が真北方向を取り、四町(428m)四方の範囲で外郭に材木列と大溝をめぐらしていたこと。内部中央には四面廻付建物の他に、石敷や石組池などの稀な遺構があること。II期官衙南方には同一基準方向の寺が建っていたこと。寺とII期官衙の間には、四面廻付建物をはじめ大型の掘立柱建物群が存在すること。7世紀後半代から8世紀初めまで、官衙の機能が終了することなどである。

2. 調査概要

郡山遺跡の発掘調査については、仙台市文化財調査報告書第178集「郡山遺跡 XIV－平成5年度発掘調査概報－」に詳細に記述し、本報告では概要を載せるにとどめる。

第98次調査

平成5年1月18日に太白区郡山3丁目22-17の齊藤三雄氏より、専用住宅新築に伴って発掘届が提出された。申請地の周辺はII期官衙の中心部に位置しながら、I期官衙に関わる遺構が多数発見されているところである。平成5年7月12日から9月1日にかけて、住宅の建築部分7×13mの調査区を設定して発掘調査を実施した。すでに宅地化されているため盛土が厚く、旧地形の畠の耕作土も厚いため遺構を検出した上面では60m²程の調査区となった。

発掘調査の結果、竪穴住居跡3軒、土坑3基、溝跡3条、柱穴1、ピットなどを検出した。そのうちS I 1389、1391はI期官衙かそれ以降の時期で、S I 1386はそれ以前の遺構の可能性が考えられる。

(長島榮一)



第24図 郡山遺跡調査区位置図

文化財課職員録

課長 白鳥 良一

[管理係]

係長 菅原 澄雄
主任 村上 道子
主事 福井 健司
主事 庄司 厚
主事 斎藤 英治
主事 佐藤 寿江

[調査第一係]

係長 田中 則和
主任 木村 浩二
教諭 佐藤 好一
主任 吉岡 勝平
主事 金森 安孝
教諭 小川 淳一
主事 工藤 哲司
主事 主浜 光朗
主事 斎野 裕彦
主事 長島 栄一
教諭 稲葉 俊一
教諭 菅原 裕樹
主事 渡部 紀
教諭 川名 秀一
教諭 熊谷 裕行

[調査第二係]

係長 結城 慎一
主任 篠原 信彦
教諭 太田 昭夫
主任 佐藤 洋
主事 佐藤 甲二
主事 渡部 弘美
主事 工藤 信一郎
主事 荒井 格
主事 中富 洋
主事 平間 亮輔
教諭 五十嵐 康洋
教諭 神成 浩志
教諭 赤澤 靖章
教諭 竹田 幸司
主事 佐藤 淳

仙台市文化財調査報告書第179集

仙台平野の遺跡群図

平成 6年 3月

発行 仙台市教育委員会
仙台市青葉区国分町3-7-1

印刷 (株)東北プリント
仙台市青葉区立町24-24 TEL 263-1166

